

源氏物語の研究

多屋頼俊著

法
藏
館

多屋頼俊（たや らいしゅん）

明治35年、福井県に生まれる。昭和2年、大谷
大学文学部卒業。大谷大学名誉教授。文学博士。
昭和62年、勲四等旭日小綬章受賞。平成2年7
月13日逝去。

著書 『和讃史概説』『源氏物語の思想』（法蔵
館）、『日本古典文学大系82 親鸞集・日蓮
集』共著（岩波書店）

源氏物語の研究 多屋頼俊著作集 第5巻

平成4年3月20日 第一刷発行

著 者 多 屋 頼 俊

著作権者 藤 井 き ん 子

発 行 者 西 村 明

発 行 所 株式会社 法 蔵 館

600 京都市下京区正面通烏丸東入
振替京都7-2743 電話075(343)0458

© K. Fujii ISBN4-8318-3725-3

三星社・清水製本

源氏物語の研究 目次

源氏物語の思想

源氏物語を構成する基礎的思想……………五

第一 序説……………五

第二 宿世の縁 光源氏を中心に……………九

第三 もののけの力 六条御息所を中心に……………三〇

第四 宿世の縁ともものけの力……………三七

(付録)

神……………一四

宇治十帖の結末……………二六

源氏物語はいつ作られたか……………三一

女房時代の紫式部……………三五

補遺

増鏡に現われた源氏物語	二六五
源氏物語の物語論について	二七七
光源氏伝の一節	三〇〇
光源氏と朧月夜尚侍	三〇四
光源氏の須磨への下向について	三〇六
浮舟と横川の僧都	三二一
源氏物語の罪障意識	三三〇
源氏物語と仏教	三三八

(付録)

平安朝時代における法華経信仰	四〇一
日本文学史上の法華経	四一七
平安朝の浄土教	四二三

初出一覽	四四七
------	-----

後記	四四八
----	-----

多屋賴俊先生略歷	四四九
----------	-----

著作目錄	四五〇
------	-----

源氏物語の思想

すへて男も女もわるものはわつかにされるかた
の事をのこりなくみせつくさむとおもへるこそ
いとおしけれ

——ははき木——

凡 例

一、自分は、さきに文部省から精神科学研究奨励金を交付せられ、昭和十五年三月、報告論文として「源氏物語の宗教思想」を書き、次いで東照宮三百年祭記念会から研究費を補助せられて、昭和廿年六月に「源氏物語の思想序説——紫式部とその時代」を書いた。その後、折にふれて一部分ずつ修正して雑誌等に発表して来たが、ここに、これらの中から五篇を選んで一書を編んだ次第である。初めの「源氏物語を構成する基礎的思想」「神」の二篇は前者の報告に、後の「源氏物語の著作年時」「女房時代の紫式部」の二篇は後者の報告に含まれていたものである。

一、引用した源氏物語の本文は、校異源氏物語の本文に従った。但し読解の便宜のために、句読を切り、濁点を加え、また仮名を漢字に置き換えた所があるが、仮名遣いはすべて原本に従った。なお頁数は^{註校}日本文学大系に依って出しておいた。

一、本書を刊行しようとするに当り、研究費を補助せられた各機関、自分の研究を指導し啓発せられた学界の諸先輩、並に小著和讀史概説の刊行以来廿余年、かわらぬ好意を寄せられる法蔵館主西村氏に、改めて感謝の意を表したい。

昭和廿六年十二月廿五日

著 者 識

源氏物語を構成する基礎的思想

第一 序 説

わが国では、和歌は漢詩の影響を受けて、早くから文芸として尊敬せられてきたが、物語は多くの愛読者を持ちながら文芸としての第一義的価値は容易に認められなかった。源氏物語の如き、早く平安末期の頃から、学者は本文の校合に、語句の註解に多くの努力をしてきたのであったが、源氏物語そのものの価値は、主として、その優雅な言葉遣いが、歌を詠む場合の参考になるという事で、即ち歌道の補助材料として、認めていたに過ぎなかった。この伝統は連歌の方にも伝わって、連歌の補助材料として用いられ、更に一般に歌よみ文かく人の参考乃至手本として尊重せられた。また源氏物語の内容は、貴族達の理想の時代である平安朝の盛時の宮廷を描いたものであるために有職故実の材料にせられ、またその思想内容について仏教の深意を説いたものとし、或は儒教の肝要を説いたものとして、高く評価した学者もあった。がこれらはいずれも尊敬する他の或ものために補助として役に立つという考え方である。これは実際には源氏物語の価値を認めておりながら、それを適当に表現する理論をもっていないかったために、他のものに付随させて表現したのであらうとも考えられるが、なおそれは源氏物語の価値を十分に認識

していたとは言えないであろう。源氏物語を文芸として、それ自体に価値を認めて研究するようになったのは、西洋の文学研究法が輸入せられた後であって、これはまだ日の浅い事である。従って源氏物語研究の歴史は一面から見ると八百年以上にも及ぶものであるが、他面から見るとまだ半世紀にも満たない短いものであるとも言えるわけである。そのためであろうか、学者の所見に一致を欠いているものが甚だ多い。勿論いずれの方面でも研究が盛になれば、新しい問題が提出せられ、旧い問題が再検討せられて議論の尽きることはないのであるが、しかしその間に十指の指すところ十目の視るところは自ら一致してゆくものであるが、源氏物語の研究においては、そうでないものが多いのである。例えば源氏物語はどのように構成せられているのかという事について、藤岡作太郎博士は、源氏物語の本意は婦人の評論にある。竹取物語や宇津保物語は一人の美姬を中心にして、ここに集まって来る多くの男性を描いたものであるが、源氏物語は光源氏という一貴公子を中心に、これを取り囲む女性の種々相を写したものであって、光源氏は主人公であるが、これは多くの女性を集めるための方便であると言われ、岡崎義恵博士は、光源氏の道心の発展を跡付けられて、源氏物語は光源氏の求道の歷程を書いたものとも見ることができると言われた。⁽²⁾ また池田亀鑑博士は、源氏物語の巻々の構成を見ると、その巻だけで話が大体終っているものと、他の巻々に広く関係しているものとがある。空蟬の物語、夕顔の物語、末摘花の物語の如きは前者に属し、葵上の物語、六条御息所の物語、藤壺の物語の如きは後者に属する。即ち源氏物語を解剖的に見ると短篇小説的な部分と、長篇小説的な部分となる。この二つの構成を組合せて、一大長篇小説源氏物語を構成したのであると言われ、⁽³⁾或は源氏物語には構想という程のものはなく、一帖二帖ずつ興の趣くままに書き継がれたものであると主張しておられる人もある。諸氏の研究は、その立場目的が同じではないから、簡単に批評することはできないが、しかしこのように甚だしく異なる解釈が下されているのは、この物語に対する基礎的研究がまだ十分でないからであろう。

近時、池田博士等の異常な苦心努力に依って「校異源氏物語」が刊行せられ、更に詳細な索引が編纂せられているのは、まことに学界の慶事であるが、これと共に物語の内容についても各方面から綿密な基礎的研究を行なわなければならない。改めて言うまでもなく、源氏物語は、思想も社会制度も今日とは少なからざる相違のあった一千年前の作品である。従って後代人の感覚のみをもって直ちにこれを理解しようとする事には大きな無理があることを先ず考慮に入れる必要がある。我々は自分の感覚をもって、本文を鑑賞し批判する前に源氏物語を構成している思想を、社会制度を、風俗習慣を理解しようと努める心の用意が必要である。具体的に一二の例を出すと、光源氏が須磨へ引退したのは、朧月夜尚侍との関係が暴露して、これを咎められたためであるとするのが従来の学者の常識であった。しかし源氏物語の本文には、尚侍との関係は明らかに認めているが、しかも源氏は何等罪を犯してはいない。源氏をば引退しなければならないようにしむけたのは、天皇及びその背後にあった人の失政であったと記しているのである。また六条御息所はたぐい稀な妬婦と見るのが定説になっているが、物語は御息所を決して嫉妬ぶかい人だとは言っておらず、反対に御息所は教養が高く、思慮が深く、優雅で、典型的な貴婦人であるとしている。即ち諸学者の説は明らかに本文と食い違っているのである。それでは何故このような誤った説が一般化し定説化しているのかと考えてみると、光源氏と朧月夜尚侍との関係は、後世の倫理観から見ると、確かによろしくない事であるので、先ずこれを「悪」と決めてしまったのである。しかしこの問題が暴露してから、源氏の身辺は急に陰悪になり、ついに須磨へ引退したので、この問題のために引退したものと決めてしまったのである。そしてこの説が一般化したのは、この説が後世人の倫理観に一致していたからであった。しかしそう解釈しては、物語の本文に源氏は罪を犯していないと言い、また後に源氏が尚侍のことには全然触れずに、自分が須磨へ移った真の理由を述べ懐しているところと明らかに矛盾してくるのである。また六条御息所を嫉妬心の権化の如くに見るのは、御息所は

葵上と対立して源氏の愛を争う位置にあったが、はからずも葵上と正面衝突をして甚だしい恥辱を蒙ったことがあった。ところでその後、葵上は御息所の生霊に苦しめられ、遂に死に至らしめられたのであった。しかも葵上の死から推考すると、その前に、源氏が熱愛していた夕顔を取り殺した「もののけ」も御息所の生霊であつたらしい事が知られ、更にその後、御息所の死霊が、源氏の愛妻紫上に憑いて、まさに取り殺そうとし、更にまた、源氏の若き妻である女三宮に憑いて、これを尼にしてしまった（命は奪わなかったが、妻ではあり得ないようにしてしまつた）。このような事から後代の読者は、この生霊及び死霊を御息所の嫉妬心から現われたものとし、御息所を無類の妬婦と決めたのである。しかし源氏物語の本文は、前記の如く御息所を嫉妬深い人であるとは決して言っていないのであり、また葵上を殺した生霊が御息所から出たものであることは、源氏も御息所も明らかに認めておられるにもかかわらず、源氏はこの事について御息所を責めてはおられず、御息所もまたこれについて些かも責任を感じておられない。そして物語の本文は御息所を依然、優雅な貴婦人として取り扱っている。そうすると生霊を御息所の嫉妬心の变化とし、御息所を無類の妬婦とする解釈では説明がつかないのであつて、この説は明らかに誤つているとしなければならぬ。凡そ古典に対して（古典に限らないが）一部分を恣意によって解釈し、それが他の部分と矛盾する場合には頰かむりで通る、というようなことは学問的態度とは言えない筈である。

一体源氏物語は、人生をどのように考えているのか、というと、一般近代人のように、自己の意志に依つて開拓してゆくもの、とは考えないで、反対に、見えざる或力に依つて常に導かれ、後から押されて進んでゆくもの、と考えている。勿論、一応はそれぞれ自己の意志によつて行動するのであるが、一步深く立ち入って顧ると、自己の意志、自己の力と思つていたものは、実は自己のものではなくて見えざる或力であつたと考えている。尤もその或力に一切を委せて、自分は全然受身の立場にあるというのではないが、その或力は自己を包み自己を越える偉大な

強力なものである、と考えているのである。その或力とは何か、というと、一つは宿世の因縁の力（因果応報の理）、もう一つは「もののけ」の力であって、人生はこの力に支配せられていると考えている。以下この二つについて考察したい。先ず「宿世の縁」について、先に少しく触れた源氏の須磨引退の事情から考察しよう。

第二 宿世の縁

——光源氏を中心に——

一 光源氏の須磨引退の事情についての疑問

光源氏が須磨へ引退し、次いで明石へ移った事件は源氏物語の中で最も波瀾の大きな事件であって、須磨へ移る前の源氏は、桐壺院の限りなき寵愛に包まれて、地位と権力と美貌と才能と、あらゆるすぐれた特権特質を一身に集めて、思いのままの生活をしていた、その若き日の物語であり、明石から帰京した後は、桐壺院の背景を離れて、自身の力をもって栄華の絶頂を極めた壮年以後の物語であって、須磨・明石における二年半の生活は、源氏の生涯に、従って源氏物語の上に、明確な一線を画するものであることは、従来説かれてきたところであるが、その須磨への引退はどうして起ったのであろうか。従来学者の説かれたところでは、或は臈月夜尚侍との関係が暴露して、その罪免され難く、遂に近流になったのであるとし、或は臈月夜尚侍との関係から、流謫の内議もあると聞いて、源氏は心の中で藤壺中宮との秘密について、我と身を悔い責めて、引退したのである、⁽⁴⁾ということになっている。⁽⁵⁾

しかし物語の本文によれば、光源氏は決してそのようなことを言われず、飽くまで無実の罪であると繰り返し主張しておられる。単に人に対して言われるだけでなく、神に対しても無実の罪であると訴えておられるのである。けれど物語の本文に、無実の罪であると明らかに記るされているのに、後世の読者が根拠もたずに、何々の罪によってなどと言うのは、正しい解釈ではないであろう。またそのように解しては、前後の文と矛盾するところも出てくるようである。しかも一方、須磨における光源氏は、深く畏れ謹んで、女人を近付けず、専ら仏道に心を入れておられる。光源氏は何の故に畏れ謹んでおられるのであろうか。光源氏をして須磨へ引退せしめた真の理由は何であつたのであろうか。先ずこの問題から考察してゆきたい。

二 光源氏の須磨引退は無実の罪による

(1) 無実の罪であるという光源氏の主張

私は先ず、光源氏が無実の罪であると言っている主張に注意したい。光源氏はいよいよ須磨へ移ろうと決意して、左大臣に別れの挨拶に行かれた時、

とある事もかゝる事も、前の世の報にこそ侍^{はべ}なれば、言ひもてゆけば、たゞみづからの怠りになむ侍。さしてかく官爵を取られず、あさはかなる事にかゝつらひてだに、公のかしこまりなる人の、うつしざまにて世中にありふるは、咎おもきわざに、ひとの国にもし侍るなるを、遠く放ち遣はすべき定めなども侍るなるは、さま異なる罪に当るべきにこそ侍るなれ。濁りなき心に任せて、つれなく過し侍らむも、いと憚り多く、これより大きな恥に臨まぬさきに、世を遁れなむと思ふ給へ立ちぬる（須磨三〇三）